ロ上詞

是ハ諸国一見乃僧にて候はぢ我
いまだ西国をミず候ほどに此度
思ひ立西国行脚と心ざし候ハ
あら嬉しや急ほど程に是免りや
は菜く津の次磨の浦よ着て候又
是なる様色をミて我えやうなる
融る松乃大いり之海謂乃なれば

事なくましし氏あらわ浪人よ
是りや悦思ひばさてハ此松ハ
いはしの松風村雨とて二人の
海士乃旧跡かやいたはしや
其身ハ土中に埋もれぬれども
名のみ残る世の験とてかはらぬ
色の松ひと木緑の秋をのこす

詞
ことの哀さよかやうに経念仏
して弔ひ候へはいざや秋の日の暮
なつひとて雁聞えてはおの
山本の里まで雁音く行へと
見えぬ海士の家に立よわ
一夜をあかさばやとおもひ候

一セイ
塩汲車わつかなる浮世に

廻るり舟さよ渡こゝもとや
須磨の浦月さへぬるゝ袂かな
心つくしの秋風に海ハすこ
しとをけれども行平中納言
関ふ越すと詠しけん
浦わの波のよる〱ハげに音
ちかきあまの家里はなれなる

通ひ路の月よりほかハ友もなし
実や浮世乃わざなからことに
つたなき海士小舟をわたり
かねたる身の果のわびしさよや
いつまでかくの汲み汐を見車
よるべなき身ハ海人乃袖ぞよ
おもひを月にさへぬらす袖かな

野分塩風いつれもけにかゝる
所ハ秋なりけりあら心すこの
夜すからやいさ／＼塩を
くまんとて汀に満干の塩衣
しほころもの袖をむすひて
肩にかけ汐くむためとハ
おもへともよしそれとても

女車よせてハ帰るかたを浪
あしへのたつこそハ立
さわき四方の嵐も音そへて夜
寒何とすこさん更行月こそ
さやかなれ汲ハ影なれや焼
しほけふり心せよさのみなと
海人のうき秋のみを過さん

松島をしま海の月よりも
うきなをながせし心あかしく
運ふいさまみちのなを恋衣や
堤り藻塩を海袂めしか来我
ちこひしもあこなり満ち引塩
伊勢乃海のかさ見衣うろ
二度世よ出りや松乃お立

霞むねよ塩路や逢なき聞ろミ潟
うれ見ゆ聞る見潟愛八がお衣
松塩よ波よ寄るざり我蓋ちら屋
なさの塩なき浮力ろと人よや
よ秋もはき乃くしきしなほ
志わを汲やんてこ秋も月よう
お登りしあまきいつ秋よ戯月乃

いかにせや うき秋しやゝ袖も
月あるを 月をひとはうつるハ
ぬる衣見しか乃よ衣裳に
たまさかのきてそゞし恥もハぬ
塩路の眺や 塩屋乃あるし漂
帰るてはゞ前後のしりや思ふ
ゞの小見なる志田や荒うき道

案内申しは 誰にて渡り候ぞ
諸國一見乃僧にて候一宿
宿を貸し候へ 暫く御待ち候へ
あるしにそのよし申候へし
いかに申しはゞ旅人の宿へはゞ
一夜乃宿と仰は 何のまわま
見苦しき塩屋ゆさく難よ御宿是

なかりし跡とて露はかりも不
寄まじく思ふ二人せめては汐汲
の里人恥かしや申さむと
夕はいやしき身を言問ふ人もな
き渚乃よに志かしこそ思す
寂しうめしむかし心の跡
此上ハなにをか包ミさふらふべき

ゆふべの袂ハすゝ汲ぬるゝ秋よ
おなじ松陰乃こ苔の下なから思
とり飛下ハりせ給ふ松風村雨
二人乃女の幽霊是まて来りたり
さても行平三年かほど
御徒然くの御舟遊ひの月に
汐汲ハ乙下承蘭夜塩屋に還

あ乃し女まがおもひゐりつ秋

ハいろをそへしがわら小かまど

ぬあまやとへ松風とさめ悦

めさ秋しよわけよりなか須磨の浦

以万濃海士乃塩焼衣色の人てく

がとわのきぬ煮そうふ幾なや

かくて三年も過行平卿よ

乃かり笹ひ　ハいそとなくて

世をはやうず斯ひぬと申し

よわ　あゝ恋しやなまよそもみ

いはのよ孫香流を松のきも

あ雨も袖のみ濡てよしなやあ

男よも及ハぬ逃さるへ波磨乃

あまを小畳ぬりし　あは常ひて

よひ竹へ窓草乃露も思ひ出
見よ所はしづく心狂氣よかれ
衣裂乃ね煮飯や折ふしたり
神のたすきもなかく濃上裳裾よ
きえし浮方也薪よし色を
思ひ出裾ハなかりしや行東煮
中納言二年あき寒より麿乃蘭

邦ハ上竹ひしかごろ誰おと裳
形見とも此よそゑかし獨衣を
残し置竹へ花もたぶ衣度よ
げやましおりひ夕葉すみ小
誰小露のまもやすら裾たまう
あちなかや高さしえうとけ
あふと高きこそ裾なくハ立すかし

帰るさ知らぬ侍者庵 跡に残る光の
村雨聞志りしもぬるゝ花
まぢかりて人来たれ
あるたのもし深うくや
立ち迷ふ雲 山の見えに
生ぐさきしも我もかゝ海こそ
かれこれならば猿とも座ましは

是はなほ君こそましまさめ
須磨の松のみどり立つ海こそ
ありしも来たりて見るより
今なほ松を見るなり松に
少しも伺へるうきも狂ひ候ふ床の
宮殿を巻きよすりて安枕の
夢に見えて由緒あるが我語として

よひ舟へ漕出て帰る波羅音の
須磨乃浦のけて明やすし諸ら
山本諸し関路粟も降々に
裳も諸なく来なかりけて西吹く
なさしもれき秋たまま風
りうきや殘はきらせく